

## 海外出張の思い出（ナイジェリア編⑥）

高島敬明

事故に対するナイジェリア警察の、〈本人の不注意から起きた事故である〉との判断が下され本社への報告も終わり一応一区切りがついたので、日常の我々の健康管理のため日本から派遣されている医者の方を訪ねました。先生は本事故にずっと一緒に携わっておられただけに次のような話をされました。「私は真っ先に現場に駆けつけましたが、それはそれは目を背けるような大変な事故でした。そこでは T 班長がテキパキと指示しながら現場をキレイに片付けていましたが、大変立派でした。死亡した作業員と 5 日後と一緒に室蘭に帰国予定の仲間が泣きながら駆けつけて来ました。遠いアフリカの現場でこのような大事故が本人だけの責任であるかのように決着しましたが、こんなことでいいのでしょうか！ 日本では考えられないことです。」とやりきれない表情で話されました。

先生にいつもの作業員への診察治療のお礼を言って帰ろうとすると、「高島さん！」と呼び止められました。先生は唐突にナイジェリアの蛇の話を始められました。「この国の蛇は全て毒蛇とと思ってください。蛇の毒にも色々あり血液が固まっていくもの、体がしびれて来るものなどありますが、怖いのは神経性の毒を持ったやつです。中でも〈グリーンズネイク〉と、言って小指ほどの太さで長さが 20~30 cm 程度の深緑の小さな蛇で、地上水中どこにでもいるこの小さな蛇が最悪です。これに噛まれると 5 歩もたないと言われます。一二……五と数えるとパタッと倒れるのだそうです。」と教えていただきました。血清があってもこの蛇は間に合わないようで、とにかく噛まれないようにするしかありません。

医務室を出てラゴスに帰る支度をして名古屋の作業員にお別れに行きました。大半の作業員が半年も前に到着した機器の仮置き場でトラックへの積み込み運搬作業をしていました。仮置き場では半年前に置かれた機器の間は草ぼうぼうで、機器番号の確認も草を掻き分け大変な苦勞をしながらやっておられました。私は皆さんにお別れの挨拶をするため集ま



クーラーの効いたビッグバスでの休息

ってもらいました。皆さんには、今回の事故処理がとにかく終わったことを告げ、来年には皆さんと一緒に日本に帰りましょう！と言いました。ようやく元気になった T 班長にも「一緒に帰るぞ！」と声を掛けました。彼は笑顔を作って私の手を握り返しました。先ほどの先生の毒蛇の話皆さんに聞いてもらいましたが、やはり機器のケースを取ると草の中にその蛇がいるそうです。現地人はすっ飛んでいなくなりますが、駆除は日本人がするそうです。

飛行機のトラブルからカノー空港に急遽着陸し、そこからタクシーで 300km を 4 時間休みなく走って現場に到着してから早一週間が経ちました。色々なことが走馬灯のように思い出されながら巨大なカドナリファイナリー建設現場を離れカドナ空港へと向かいました。ラゴス空港に無事到着しエマニアル運転手に会うことが出来ました。ラゴスのキャンプに帰り早速 H マネージャーに報告をしました。問題解決を喜んでくれましたが、私の心中は複雑で悩んでいました。明日 S マネージャーに報告に行くと言われました。

翌日事務所に着くと、当社の本社から私宛に通信文章が入っているとのことでした。それによると亡くなった方のご遺体は成田空港で当社建設担当の常務が出迎え、ご親族、相手の会社にも当方の非を認め丁寧に挨拶したとのことでした。私の電文が

意味不明だったとのことで役目が果たせず忸怩たる思いでしたが、これで良かったのだと思いました。本人の過失だけでなく当社の責任も反映した補償がご家族に支払われるとのことで、遠いアフリカの地で無念の最期を遂げたご本人の供養にもなると思われました。S マネージャーも訳の分からないナイジェリア国での日本人の処罰が無くて安心したと話されていました。この国での裁判となれば長期間行き来しなければなりませんし、費用も莫大になります。とにかく日本を遠く離れ異郷の地での事故対応はこれで終了し、これ以降は日本サイドの話になります。

〈これから何回かに分けて、日本では考えられないような出来事を書いて行こうと思います。ナイジェリアは本当に異郷の地でした。〉

キャンプ、ラゴス港、C 化工建設との単純な行き来で何か月かが過ぎました。キャンプは相変わらず大洋漁業から買っているエビの料理が大半を占めました。毎晩魚国の T 料理長に言われエビの背中の黒い筋を取る作業を何人かでやります。エビの食べたカスが溜まっているのだそうです。T さんはラゴス湾で取れたエビだから何を食べているか分からないと言っていました。日本大使館の 2 等書記官が水上スキーをしていてラゴス湾で行方不明になった時、懸命に捜索しましたが見つからず困り果てて懸賞金を付け新聞広告を出したそうです。すると翌日には 12 体の遺体が大使館に運ばれて来たといいます。こんな話はいくらでもあるのです。

カドナから帰ってきてしばらくしてから悲しい知らせが入って来ました。カドナの宿舎での毎夜の酒宴にお呼び頂いた T 建設の人のいい監督の C さんが亡くなりました。コンクリートの骨材が大量に無くなるとこぼしていました。C さんはある夜意を決して深夜資材置き場に 2 人で乗り込んだそうです。犯人のダンプカーを見つけ、彼はダンプの前に立ちはだかり車を止めようとしたのです。車は残酷にもそのままスピードを上げ C さんをひき殺して走り去ったとのことでした。私は会社を代表して電報を打ち、お悔やみを申し上げました。私が見たカドナでの棺の儀式が繰り返され、またご家族のことを思うと断腸の思いで悲しくて沈み込みました。

建設工事は終盤に差し掛かっていますが、まだまだラゴス港で荷揚げした、200t、300t の機器がカド

ナに送られていきます。工事が始まる前には国道など現場に通じる橋や地盤の弱い道路などはナイジェリア政府の要請で英国の会社が補強工事を施工しました。補修した後の道路や橋は何の心配もなく、イタリア製のゴールドホーファーというタイヤの多いムカデのような車に 300t、400t のものを積んで時速 60~70km の速度で現場まで運行しているのです(日本ではとても許されない速度です)。最後の工程に差し掛かった時、ラゴス市の国道の工事予定が突然入って来ました。当然使用する道路のルート変更を行い、新しいルートの補強をしなければなりません。我々の手で道路調査をして極力橋のないルートを選びましたが、ニジェール川の支流が多く、どうしても 6 つの橋を補強する必要があります。川幅は狭いのですが水量は比較的多い川でした。ラゴス市に話しても建設当時の設計図もなく、許容重量何トンの橋なのかも分かりません。橋の形態は鉄橋が 2 橋、コンクリート橋が 4 橋です。鉄の橋の補強方法は分かっていますが、コンクリート橋はコンクリートの中の配筋などが分からなければ非常に厄介です。とにかく小さな間隔でたくさん補強するしかありません。木材、H 型鋼などで人力とトラックに付いている小さなクレーンで作業を進めます。流れる川に 4 人の当社のベテラン作業員が腰まで水につかり作業をします。魚河岸に行けば店員が付いているような胸まである長靴を履いて作業をします。私は裸で短パンをはき、ロープを腰に結わえ橋の上で待機しています。私のロープの端っこは運転手のエマニエル大尉等何人かで待機するわけです。川の中の作業員は胸までの長靴を履いて橋を支える木材の基礎を固めるわけですが、ちょっとしたはずみで長靴に流れる水が大量に入り込みます。するともう体の復元は不可能で早い水の流れに流されます。下から悲鳴にも似た「係長う、係長う！」という声が聞こえると私の出番です。エマニエルと声を掛け合い水に飛び込みます。ロープを持って流される作業員まで懸命に泳ぐわけです。予め繋いでいた浮き輪に導き引き揚げます。それを何回も繰り返しました。炎天下ですから非常に疲れます。とうとう一人の犠牲者も出さずにやり遂げました。エマニエル大尉が私の顔の前につこりしながら親指を立てた拳を突き出しました。

(つづく)